

令和6年度 第8回未来ビジョン会議 要点記録

- 1 開催日時 令和7年1月21日（火）午後6時30分から午後8時
- 2 開催場所 伊東市役所 8階 大会議室
- 3 出席者 伊東市未来ビジョン会議委員16人（欠席2人）
市長、中村副市長、岸副市長、教育長、企画部長、杉山理事
事務局（企画課長、企画課課長補佐、企画課主査）

4 会議次第

- (1) 開会
- (2) プレゼンテーション準備
- (3) プレゼンテーション
- (4) 閉会

5 プレゼンテーション概要

- (1) 市長挨拶

【市長】

改めまして皆さんこんばんは。本日が8回目の会議ということで、私が皆様とお会いするのは、6月に開催した1回目以来となりますが、これまでに様々なディスカッションを進めていただきました。

本日は、プレゼンテーションをしていただくということになります。今年度は「第十二次基本計画の策定に向けて、理想の伊東市を実現するための施策」をテーマに、地域や社会の課題、または顧客や対象者が抱える課題を整理し、理想的な未来を話し合う中で、取り組んでいきたい事業等、様々な内容を議論いただいてまいりました。また、長期ビジョン策定委員との意見交換も踏まえまして、良い点や改善点など、新たな気づきを発見することができたかと存じます。

本市の将来を担う皆様が、本市の将来像をどのように描いているか、非常に興味深く楽しみにしています。各グループから出された御意見につきましては、今後、市の事業実施、あるいは地域の皆様への御提案といった形で、参考にさせていただきます。皆様におかれましては、これまでの議論を通じてまとめられた御意見や御提案など大いにお話しいただきたいと考えております。それでは、よろしくお願いいたします。

- (2) 説明

【課長】

それではプレゼンテーションに入ります。本日はA、B、Cの3つのグループから5つのテーマについてプレゼンテーションをしていただきます。Aグループは危機管理と都市の分野、Bグループは観光の分野、Cグループは教育と福祉の分野になります。

プレゼンテーションの時間が8分間、その後に市長等との意見交換を5分間で行い、それを5回繰り返すこととなりますので、よろしくお願いします。それでは早速ですが、プレゼンに入りますので、まずAグループの危機管理の分野のグループからお願いします。

(3) Aグループ・プレゼンテーション【危機管理】

【T委員】

こんばんは。Aチーム委員のTと申します。本日は「**危機管理**」をテーマに話します。私たちのキャッチコピーは、「**みんなでたのしく、ひとりでつよく**」です。このキャッチコピーと具体的な内容について話していきます。まずは、伊東市の現状について考えました。伊東市は、海が近いので当然坂道が多い、又は山道が多かったりと、道路のことであったり、防災倉庫の中の状況を私たちはあまり聞いたことがなくて、それは一体どうなっているのかということであったり、あとは海に近いところに観光地があり、そこでイベントが開かれたりしていて、避難場所を知らない観光客に対し、市民がどうやって誘導すればいいのかと、そういうところもわからないような現状となっています。

一方、私たちにも課題となり得る現状があって、ハザードマップを確認していないことや、災害に対し、ここに津波が来ないだろうとか、これぐらいなら大丈夫だろうという先入観が働いていて、それを払拭しようとしていなかったり、そういうことに関心がなかったりすることが私たちの現状と課題となっています。これらを踏まえまして、防災教育の機会が不足していること、もしくは、実践的な防災教育の機会が不足しているのではないかなという意見が出ました。

そこで、私たちの解決策として、主に三つ紹介します。まずはこのキャッチコピーのみんなで楽しくということにつながりますが、小・中学生、高校生の縦割りでチームを組んで、ランダムの出発地点から避難場所を目指したり、決められたルートで避難をしたりする防災イベントを開催するという案です。縦割りにした理由は、今までは高校生は高校生で、小学生は小学生でというやり方で防災訓練が開かれていますが、いざ災害が起きたときに、自分たちはそこにいるとも限らないし、どんな服を着て何を持っているのかということもわからないので、家から学校に行って、整列して、点呼をとって終わりではなくて、ランダムの出発地を最初に決めて一斉にスタートし、そこからどう避難して、避難場所までどれぐらいかかりどういう危険があるのか、危険を伴う避難場所へのルートについて再検証することなど、小中高と年代が違う人たちが協力しながら進めていくというイベントがみんなで楽しくということにつながるのではないかと思います。

二つ目が、伊東独自の防災に関する資格を作るという制度の創設になります。今、ジュニア防災士や防災士の資格はありますが、高校生はまだしも、小・中学生が取得するには難しいし、取得方法も分からないのではないかと思います。だから、伊東市での独自の防災に関する小・中学生でも取りやすいような資格を作って、でも取りやすいからといって難易度を簡単にするのではなく、自分も避難できて避難誘導できるような能力が身につけられる程度の資格を作って、それで防災に関心を持ってもらうということが有効な手段ではない

かと考えました。

三つ目は、海上輸送訓練の実施です。海上保安庁とか海上自衛隊とか、どこが協力してくれるかはわかりませんが、災害時に道路を走る車での輸送が困難となってしまったときに、おそらく海上輸送が有効ではないかと思い、この案を考えました。自衛隊と協定を結んで終わりではなく、伊東市からお願いをして、大きい防災訓練を開催する際に来ていただき、海上輸送のデモンストレーションを行うことや、実際に船を呼んで、どこに発着するのか、また、物資を下ろした後にどのように展開していけばいいのかっていうことを訓練することで、災害時に避難物資が届かないということがなくなるのではないかと思います。

これらの解決策を踏まえて伊東市がどういうふうになってほしいかという、市民が安全・安心に暮らすことができるというまちです。先ほど、災害に対して先入観があると言いましたが、多分、市民が望んでいるのは、その先入観を解除してほしいわけではなくて、災害が起きたときに安心して暮らせるような生活ができる、そんな環境が整っているっていうことが、市民の望むことではないかなと考えて、ビジョンとして、市民が安全・安心に暮らすことができるまちということを考えました。また、伊東市を訪れる観光客がたくさんいるので、その人たちもこういう制度を見て、安心して訪れることができるなと思ってもらえることが伊東市のビジョンではないかと考えました。

最後に私たちに何ができるかという、まずハザードマップのチェックと非常食のチェックです。確認をするように言われても確認しない人が多いと思いますが、自分たちで提案するからには、しっかりとそういうところをチェックして、また、防災訓練への積極的な参加と何かあったときにすぐ対応できるような近所とのコミュニケーションを大切にし、防災訓練の場でもコミュニケーションをとるということが今からでもすぐにできる解決策の一つではないかなと考えました。以上で発表を終わります。

【課長】

それでは、市長等との意見交換をお願いしたいと思います。

【市長】

時間内でとても上手にまとめていただきました。

最初に現状の分析をしていただいて、海もあるし、坂道や山道もあるという地域的なこと、それから防災倉庫の確認をしたことがなかったということや、避難場所も特に知らないということ、それからハザードマップに対する関心がないということについて、確かに言えることかと思います。

そこで、課題解決としては防災教育をやっていくということで、小中高生が縦割りで避難訓練というのは、すごくいい提案だと思いました。地域に住んでいるあまり知らないお兄さんお姉さんと、小さい子が一緒にコミュニケーションを取れば、今度一緒に公園で遊ぼうねとか、会話もできるかなと思います。また、独自の資格、これもいい提案だと思いました。いいネーミングをつけて、例えばマイナンバーカードみたいな資格証を作つてあげると、防災リーダーみたいな方が生まれてくるかなと思いました。それから海上輸送ですけれども、

自衛隊だけではないというのはまさしくそうであり、伊東には遊覧船や遊漁船もたくさんありますし、東海汽船等も訓練ならば参加していただけたと思います。いろいろな手立てがあるので、御提案いただいたように有事に備えて進めていければと思います。結果としては、安全・安心に暮らせるまちということが住民の方には生まれるでしょうし、市外の方にもそういうまちですってということでアピールすると、今まで以上に観光客も伊東を選んで来ていただければなと思いました。意見交換というか私の感想になりましたけれども、私の後、中村副市長からご意見いただきます。

【中村副市長】

プレゼンテーションありがとうございました。今回危機管理というテーマで考えていただきましたが、去年から防災という面では、本当に大きな出来事が2つありました。まず1月1日の能登半島地震、そして7月から8月にかけての南海トラフの注意情報ということで、先ほどの発表でもありました防災とイベントにもつながりますが、按針祭の花火大会の日が、まだ注意情報が出ている中で市として開催をどうするか、そういう判断をしなくてはならない状況がありました。災害対応という観点で、私たちもこれまで薄々は海岸にこれだけの人がいてどうなのかなと思ってはいましたが、実際本当に地震が来るかもしれないという状況で、市としてどういうことをしたらいいのかっていうことを、改めて感じたというのが去年でした。

先ほどのプレゼンの中で、年代の違う縦割りの訓練というお話がありまして、小中高だけではなくて、例えば大人の方とかお年寄りとか、そういう年代の違う方が一緒に組んで、参加するっていうのは非常にいいことだと思います。訓練はただ逃げて自分の身を守る、それが一番大事ですが、それだけではなくて、自分よりもっと体が動かない人をどうやって助けることができるのかとか、避難した先では、自分は何ができるかっていうのを考えるきっかけとして、そういう世代の違う人たちと一緒に訓練するというのは非常にいいことだなと思いました。もう一つ、海上輸送の物資輸送の関係ですけれど、以前の市の防災訓練の際、海上自衛隊のホバークラフトっていう港がなくてもそのまま砂浜に着岸できるような船がありまして、そこと一緒に訓練したこともありました。とにかく物資が滞らないっていうことが災害対応の中で一番大事なことだと思いますので、これからもそういったものの流れができるよう、市としてもいろいろ研究していきたいですし、いずれにしてもとても現実的な提案で参考になりました。ありがとうございました。

【課長】

それでは、都市の分野の発表に移ります。よろしくお願いします。

(4) Aグループ・プレゼンテーション【都市】

【O委員】

我々Aチームでは、昨年に引き続き公共交通に関しては、鉄道バスの本数が少ない、運賃が高いといった声が多くあがりました。また都市のインフラ面に関しては、道路が狭い、歩行者動線が少ない、駅前にゴミ箱や喫煙所がないので、ポイ捨てが多い。空き家空き店舗な

どの遊休資産が増えている、子どもなどの若い人が遊ぶ公園や居場所となれる場所がないなどの声が多く上がりました。

これらの問題を深堀していきますと、公共交通を含めた交通インフラは使いにくいものと認識され、利用者の減少だけでなく、担い手不足にも悩まされています。それゆえ、モータリゼーションが加速し、住む場所や商業店舗の場所は散り散りに拡散していきます。昔はある程度の密度で地域を形成し住んでいたことから、徒歩メインの商店街や公共交通が成立していた面がありますが、住む場所が拡散したことで、商圈の数十キロ単位に設定した郊外型のチェーン店舗しか成立できなくなっていつています。また、伊東に限らず日本人は郊外に土地の安さの新築を求めますが、家を建てた当人たちは買い物難民化し、このような場所に建てた家や土地は相続されても売ることすら難しいのが実情です。こうして人口減少社会であるにも関わらず、延々と空き家を量産しているのが現状です。車依存社会はご存知のように中心市街地を空洞化させ、車以外の交通手段を使う高齢者、特に高校生以下の若者は、自身の交通手段で行ける居場所がなくなってしまいます。深堀すると全てが点と線でつながり、悪循環を起こしていることがわかります。

そこで我々は、こちらにあるように「人をシェアする 時間をシェアする」と掲げています。これは自分だけの空間である自家用車がメインである中で、他人と空間を共有する公共交通を推進する意味でのシェア、様々な遊休資産を活用してコミュニケーションを活性化していく中での時間のシェアを意図しております。公共交通については、今すぐには5つの政策が必要と考えます。全国的に見れば自治体がバス運転手1人を確保するために数十万から数百万の財政支援を行い、運転手人材の獲得競争が激化していますが、静岡県内でそういった支援をしているのは、現在三島市のみです。未だ運転手確保で先行できる可能性が高く、新たに運転手となってくれた人に対する数十万円規模の祝い金や期間限定の手当など、バス運転手確保のための財政支援は今すぐやるべきと存じます。あるいは、東海バスさんが現在負担している免許取得費用や家賃補助の一部だけでも負担してもいいのではないのでしょうか。通勤通学定期への公的補助は昨年の発表でもお願いし市長からも高校生の通学定期の検討を始めたといの発言をいただきましたが、比較的東京に近いという立地のポテンシャルを発揮し、移住を推進するためにも必要であると思います。市民向けの1日乗車券などの企画乗車券は、弊社や東海バスさんの努力が必要な一方、利害調整や財政支援においても、伊東市の協力も必要と考えます。伊東駅から南伊東駅周辺を中心部、川奈駅周辺においては比較的土地の高低差が少なく、シェアサイクルは有用であると思います。シェアサイクルは、ほぼ無人運営でありながら、地域内移動の利便性を高めることとなります。沼津三島でシェアサイクルを展開する加和太建設さんにご相談してみたいかがででしょうか。

地域コミュニティの市内遠足への移動費用補助につきましては、新井わかご会という地域の住民団体ですね、路線バスを使った花見遠足を実施し、30人が参加した旨が4月5日付の伊豆新聞の一面で報じられました。そこで公共交通を使った遠足を市内で行う地域コミュニティへの鉄道バスの運賃費用補助を検討されてはいかがででしょうか。人々の居場

所の確保と公共交通の有効活用で一石二鳥であると思います。

都市整備に関しましては、県や国でしっかり声を上げて財源を獲得しながら着実に道路のミッシングリンクが多い歩道、小学生がのびのびと遊べるような公園整備を進め、現在検討される伊東駅前広場は観光客も含めた歩行者公共交通利用者に優しいウォークアブルな現在の案に喫煙所やゴミ箱をプラスしたもので推進していただきたく思います。また、昨年提言のトランジットモール実験の展開も引き続き要望いたしますが、他に4つの政策が必要と我々は考えております。

1つ目は、昨年策定の立地適正化計画で指定された宇佐美、中心部、吉田地区などの居住誘導地域、幹線バス鉄道沿線の生活拠点において、既存家屋や空き店舗の改修、集合住宅の新築を行う人に一定の補助制度を新設し、現在進めるバス路線集約とともに、無秩序に拡散した都市の集約誘導が必要と考えます。

2つ目は、空き店舗・空き家活用のために不動産業者と市の共同調査、マッチング方法の確立、調査に際し、不動産業者をボランティア化しないことで協力的になっていただき、協力業者への予算措置が必要であると思います。また、先日の調査結果について、昨年協定を締結した空き家対策の法人と共有した上で対策を講じることや、官民の役割分担を明確化することも必要であると思います。

3つ目は、空き店舗を活用した中高生の居場所作りです。例えば福島県白河市に一般社団法人が運営する「エマノン」という高校生びいきのカフェがあり、高校生の飲食を半額、飲食せずとも無料でスペース利用ができるようになっていきます。高校生のフィールドワークをしたい、手話カフェを開きたい、カードゲーム大会を開きたいなどの自己実現に協力したり、地域の人々のボランティアニーズと来訪する高校生のマッチングなどを行い、世代を超えた交流も生まれ、地元を出ていった大学生社会人が関係人口として白河に関わる拠点にもなっています。詳しくは一緒に視察したO委員のBグループから説明があると思いますが、この施設は中心市街地の空き店舗を改修したものであり、運営費用には白河市から年680万円が支出されています。こうした店舗を活用した施設ニーズを探るため、まずは伊東市から市外へ出た大学生、伊東市から通う大学生、高校生や中学生と市長や教育長とのコミュニケーションの場を創設することから始めていただけないでしょうか。

4つ目は、遊休用地や公共用地のあり方を模索し、リノベーション起業を促す実証実験を兼ねたイベントの実施です。例えば昨年末に三島信用金庫伊東駅支店の跡地がイベントや休憩のためのスペースとなりました。これはものすごくいいことだと思います。そんな中、宇佐美の小・中学生がスケボーパーク整備の署名を市長に手渡す動きが令和6年12月にありましたので、三信跡地にパンプトラックなどを設置し、スケボーやBMXのプレーができるイベントを実証実験することで、ニーズ把握、機運醸成に努めながら、それらのプレーができるストリートパーク整備を検討することから始めてはいかがでしょうか。昨年の会議でも資料を配布して紹介し今回も市の幹部の皆様方には、2部ずつお配りさせていただきましたが、その資料に載っている方が沼津ストリートパーク整備に実績のある方です。や

るかどうかは別として検討の実施自体は容易に思います。

我々の町歩きで伊東の良い点、悪い点を発見したり、ビーチクリーン活動に参画したり、他地域のサードプレイスに参画することで、まち作りのノウハウを積み上げる努力をしていく所存です。長々となりましたが発表は以上になります。

【課長】

それでは、市長等との意見交換をお願いしたいと思います。

【市長】

ありがとうございました。的をついた意見がいろいろと入っていたなと思います。まずテーマは「人をシェアする 時間をシェアする」ということで、おっしゃっている意味がよく説明の中に入っていたなと思いました。いろいろな提案があったと思いますが、例えばバス運転手確保のための支援について、これは東海自動車が独自で大型二種免許を取得させるため、一時貸付のような形でとっていますが、そこもいろいろ考えていけばお手伝いできることはあるかなと思いました。

空き家対策については、もう既にあるものをリノベーションしてまた使っていくっていうのはすごくいいと思います。不動産業の方々とマッチしていく、今いろいろな形で連携をとっています。そういう中に財政的な支援をするべきではないか、ということについても考えておりますし、現在、市外から移住した方の住宅ローンの利子補給はしております。そういう支援の中で、もう一歩先の御提案いただいたのではないかなと思いました。あと平地ではシェアサイクル、三島でもやっているということでありまして、いろいろとインフラの整備についても、これから公約事業をやっていくのですが、全部市民のお金でやるなんていうことは不可能ですので、当然国のいろいろな形での応援を最大限生かしながらやっていきたいと思っております。

それからチャレンジショップのような形になるかと思いますが、高校生にカフェをやっていただくことで経験を積む、あるいは1回外に出た大学生に、例えば夏休みとかそういう期間にお店を開けるスペースを準備しておくとか、現在、産業課で空き店舗の調査をしており、市が借りることでチャレンジショップ用の店舗を整備することについて検討しております。あと三信の駅前支店の跡地ですが、やっと朝市のイベントを今月に開催しまして、大変賑わいました。昨年、宇佐美小学校、中学校の子どもたちが2,000人以上の署名の重たい書類を持って来てくれました。宇佐美からなるべく近い方がいいと言っていましたけれども、宇佐美に近い場所ではなくても、そういうスペースがあるっていうことをアピールすればいいかと思いますが、課題はいくつもあって、音が大きいことでもあります。近隣の方がどう思うかとかそういう問題であって、今は藤の広場で集合してやっていますけれども、それでもお散歩に来て休まれている方にとっては、ちょっと窮屈な思いをしていると耳に入っております。全ての方にいいっていうことはありえないので、時間によって配慮してもらおうとか、そういう取組はできるかなと思いました。

○委員のシビックプライドをととても感じられるプレゼンでした。今後も何かしら形でい

ろいゝな意見交換ができればと思っておりますので、よろしくお願ひします。

【杉山理事】

ありがとうございます。テーマが都市ということで、かなり幅広ひ内容になっていると思ひます。その中でお説明いただきました、空き店舗も含めた空き家対策につきましては、先ほどの市長からの話にもありましたが、本市は昨年12月に一般社団法人全国古民家再生協会と空き家を有効活用するという目的で協定を締結しておりますので、発表していただいた内容を組み入れながら議論を進めていき、できることを実施していくことが必要であると思ひました。

また、シェアリングサイクルのお話をされましたけれども、私が静岡市に勤めていたときに、清水区を含めた静岡市内において、回遊ができるような形でシェアリングサイクルを実施することについて、民間企業から県にお話を持ちかけてきたことがありました。最初はなかなかそんなに簡単にいかないのかなってというような状況であったのですが、いろいろ調整し、県や静岡市が協力することで、今は静岡市内の拠点となる場所から自転車を使って皆様が自由に動いているというところがありまして、実際に通常の生活の中で使われる方もいれば、観光で来られた方が運動しながら使うってというようなこともあり、シェアリングサイクルが始まってから、好評なご意見ももらっていると伺いました。確かに伊東市では平地のどこにシェアリングサイクルの拠点を置くということもあると思ひますけれども、こういうところは民間の活力を使ってやらなければならないことなので、観光客も使えるし、住民の方も使えるということになれば、それは今後検討していく必要があると思ひました。

バス運転手の確保につきましては、静岡県三島市が助成制度を実施しているということでしたが、私も静岡県以外のところで、どういふ支援をしているのかということをお調べしたところ、県外でかなり力を入れているところだと、市ではなくて県が全体の地域を見て助成する制度や、小規模な自治体では単独で助成できないので、広域連携みたいな形で、複数の自治体がお連携をして取り組んでいるというような事例もありました。実際に財政支援というとお金がかかってくるというところもあります。一方で、昨年度も未来ビジョン会議でご提案いただいているというところがあると思ひますので、そういうところも踏まえながら、運転手がいなければバスやタクシーの公共交通機関が動かないというところがありますので、今後検討していく必要があるのかなと感じました。

【課長】

以上でAグループのプレゼンテーションを終了します。次にBグループの発表をお願いします。

(5) Bグループ・プレゼンテーション【観光】

【M委員】

私たちBグループは、「こだわった情報発信で市民が観光を創る」というキャッチコピーとし、サブテーマを「伊東市民の認識を変える」としました。

この方向性として、伊東市民の観光リテラシーの向上が、観光客の観光リテラシー活性化

につながり、伊東市が観光地として活性化するのではないかと思います。

このテーマを考えるに当たり、グループ内で話し合った際に4つの問題点がありました。

1つ目は、伊東市民が伊東の観光資源を把握していないということです。観光資源について、聞いたことはあるけれども、行ったことがないという人が多いということです。

2つ目は、伊東市民が伊東に魅力を感じていないということです。魅力を感じていないから、聞いたことがあることに對し、自ら調べることをしないのかと思いました。

3つ目は人手不足です。シャッター通りが多く、観光客が来た際に、他に魅力がないのではないかと思います。

最後に、バスなどの公共交通機関の本数が少ないため、車を所持していない学生などが遠出しにくく、すべての問題に交通問題が含まれているということです。

【A委員】

私からは2つ問題点を述べさせていただきます。

1つ目は、遊ぶ場所が少ないということです。伊東市の遊ぶ場所としまして、ぐらんぱる公園、シャボテン公園、小室山等があります。しかし、若者が遊ぶとなると、これらは候補から外れてしまいます。一方、グランイルミなどの若者向けもありますが、限定的で少ないと思います。

2つ目は、イベントが少ないことです。伊東市には、「I TO MARCHE」などの若者でも楽しめるようなイベントがたくさんありますが、周知の範囲が狭く限定的であるため、市民や観光客にも知られていないと感じました。私は、「I TO MARCHE」にボランティアとして参加させていただいたことがあります。高校生が楽しめるような屋台があるにも関わらず、学生のお客さんが少なかったです。

これら2つの問題点から、私が思うこととして、伊東市は自然の豊かさが魅力であり、海もあって山もあるのに、自然を生かしたことができていないのではないかと思います。

【O委員】

伊豆伊東高校のOです。私からは具体的な方策について話します。主に2つ考えました。

1つ目は、市民の観光リテラシーの向上です。M委員の話にもあったように、市民が観光に対する認知度を高めることが大切ではないかと思います。市民が観光地の魅力を語れないと活性化にはつながっていかないので、そこに尽力をしていきたいと考えました。具体的な方策としましては、モデルコースの作成と、観光地に対しての割引券の配布です。

モデルコースにつきましては、現在でも市役所からある程度のコースをピックアップしていただいておりますが、点在しているため、ルートや所要時間など細かく書かれているものがないです。るるぶトラベルの情報のように、市や地元市民で作っていくことが望ましいと思います。

観光地に対する割引につきましては、我々が行って感じるということが重要ですが、高校生を含め、通常料金ですと足が遠のいてしまうと思います。そこで市民割を設けてもらえると我々としても行きやすいです。短期的にみると損失があるものの、長期的にみるとシビッ

クプライドの醸成につながり、費用対効果もあると感じました。

2つ目はサードプレイスの醸成です。先ほどの〇委員からの提案にもあった通り、コミュニティカフェの定期的な開催が重要であると考えます。私も福島県白河市にあるコミュニティカフェ「エマノン」に視察に行っていました。コミュニティカフェは、目的に応じて市民が交流できる場のことであります。伊東市にもあるとは思いますが、認知度が低いです。認知度が高まると、エマノンのように近づいていくのではないかと思います。先ほど紹介があった通り、エマノンは高校生びいきのカフェです。飲食が半額になって地元民と交流できる魅力があります。私が特に魅力を感じたことは、ワークショップが充実していることです。ワークショップが開催されることによって、地元民との連携がとれているのではないかと感じます。これらを踏まえまして、ワークショップが開催されていればコミュニティカフェができるのではないかと思います。ワークショップではなくてもイベントのようなものが定期的に開催されれば、コミュニティカフェに近いような運営ができると思いました。イベントは小集団でやっているところもあり、広報によって周知されれば集まると思いますので、募集掲示板のプラットフォームを進めていただきたいと思います。参考までに、伊東市のインスタグラムのフォロワーが1万人程度であります。1万人以上のフォロワーは、全体の8.5%みたいです。その発信力を有効的に使うことによって、イベントに参加してくれる人が増えると考えました。以上です。

【課長】

それでは、市長等との意見交換をお願いしたいと思います。

【市長】

順番に交代しながら発表していただき、それぞれのご意見がよく伝わってきました。

まず市民の皆様が観光の資源、こういうものを把握しなければいけないということは常を感じております。私自身も日々発見があって、市外から来たお客様から教えてもらう伊東の魅力がたくさんありまして、住んでいるとわからないことも魅力であることが伝えられます。そういうものを、いろいろと発信していくことも大事だと思います。

ちなみに私も YouTuber として、「たっちゃんねる」というのを、月1回の更新目標でやっております。内容が硬すぎて面白くないというご指摘もありますので、今度は面白味のある観光巡りをやっていく予定です。

それから人手不足のお話もありました。これは全ての産業で、担い手がなかなか揃わなくて、例えば旅館ホテルと観光の中心産業もフル稼働できない、こういう悩みがございます。また、若い方にとってはもう居場所が少ないというのはわかりませんが、民間はですね、収益がなければ出てこないの、例えばラウンドワンみたいな施設がほしいという声も聞きますが、進出してきません。ドン・キホーテが進出して来ましたが、商業ベースだと、伊東ではちょっと規模が足りないということがありますので、そこはまたいろいろな形で仕掛けていきたいと思いました。「I TO MARCHE」につきましても、もっと発信していきたいので、またその方法も教えていただければと思います。

○委員からいろいろなお話をいただいた中で、私も感じているのはサードプレイス、これは新しく作る図書館が、まさに市民のサードプレイスにしたいと、これは大きな目標です。産まれたばかりのお子さんを連れてきてもそこで過ごす場所があり、小さいお子さんも遊んでいられるという部分もあり、ビジネスマンも昼食をとりながら、本は読まなくてもそこで1時間過ごすとか、もちろん今の時期ですと、大学受験に向けてのスタディールームも用意しますし、高齢者の方もコーヒーを飲みながら新聞や雑誌を読む、そういう毎日を過ごしていただきたい。これは私の願いですから、名前は図書館ですけど、まさにサードプレイス。皆様の第3の拠点にしてみらうということをおもっています。また、ワークショップをいろいろやっております。例えば図書館の機能として、どんなのがほしいですかっていうのも、たくさんやりました。そういう中で、世代を越えて小学生もいたり、中学生もいたり、一般の社会人もいたり高齢者もいたりという中では、様々な意見が集まって、すごく楽しそうにしている姿を何回も見ておりますので、そういうテーマがあって、ちょっと落ち着ける場所を作るというのは大切なことだと、とても参考になりました。ありがとうございました。

【西川部長】

発表ありがとうございました。大変貴重な意見をお聞かせいただきまして、今後の政策の参考になるというふうに強く感じました。

発表の中でありました通り、伊東市民が自分のまちに魅力を感じて、自分のまちの魅力を発信していく必要があるっていうことは、まさしくその通りだと思っております。

伊東市では、観光ブランドブックっていうのを作りまして、伊東市の歴史や文化や自然の豊かさっていうものを市民の方もそうですし、観光で訪れる方にも、情報発信としてやっているというふうには、思っておりますけれども、まだまだ発信が足りないのかなっていうところも感じたところでございますので、そういった魅力を発信できるようなことを考えていきたいというふうに思います。

また、シビックプライドの醸成を進めているところですが、まだまだ取組が進んでいないというところを痛感しておりますので、これからは市民の方に伊東市の魅力をもっと知っていただくような取組の必要性を感じました。

それから、モデルコースを設定する必要性というのは、確かにその通りだと考えておりますので、観光協会ですとか、観光課の方にもそういった部分でのお話をさせていただきながら、周遊ができるようなコースの設定というのも、これから取り組んでいければなと思いました。とても貴重な意見、大変ありがとうございました。

【課長】

それではBグループのプレゼンテーションを終了いたします。続きまして、Cグループの教育分野のプレゼンテーションに移ります。よろしくお願いいたします。

(6) Cグループ・プレゼンテーション【教育】

【K委員】

Cグループ、教育・歴史・文化についてです。Cグループは、「学ぶ、つながる、広

がる、育む」をキャッチフレーズとして、検討してきましたことを発表させていただきます。市PTA連絡協議会から参りましたKです。早速、本題に入らせていただきます。

地域・社会の課題として、将来的に伊東市に戻ってくる人が少ないのは、子どもの頃に伊東市の魅力に触れ、感動や思い出がない事と、大人も伊東の良さを認識していないのではないかと考えました。そこで、私たちが見出した根本原因としては、①伊東のことを知る、学ぶ機会・場所が少ない。②教育環境において、選択できる幅がなく、幅があることに気づけない環境にあった。③学校と行政とのつながりが見えない。地域との関わりが不足しているため、困ったときに頼れる環境がない。④伊東市外からの目線で見ると、市外から来た人に対して、思いやりが感じられない。ということが上がりました。

また、今、社会全般に言えることですが、相互扶助の意識の希薄化、互いへの関心に欠けているため、特に保護者の立場からすると、地域への安心感がないということや、さらに大きなテーマになりますが、伊東にワクワク感がないということを根本原因と捉えました。

これらを解決するためには、行政に頼るだけではだめで、自分が感じている問題を、もっと大きなビジョンで、他者と協力して解決しようと行動する事や、問題解決ができる子どもを育てることが解決に結びつくと考えました。さらに、体験を通じてのみ、郷土愛を涵養できると考えました。

【H委員】

伊豆伊東高校のHです。

教育の面から見た伊東の課題・潜在ニーズとして、「地域の人たちとの関わりが狭まっている。」「幅広い世代の交流を増やしたい」などが挙げられました。私自身も、普段は同世代との関わりがほとんどで、大人と積極的にコミュニケーションをとること自体少ないように感じています。身近な例で言うと便利な社会が広がり、一人でもできることが増えていくと同時に近所付き合いも少しずつ希薄になっていくと感じました。また地域との関わりが減って行くと、伊東自体の関心も薄れていくように思います。自分の知らない、見えていない伊東に対して興味が持てず、伊東にはワクワク感が持てないとなってしまう、そこが根本原因につながっていくのではないかと思います。

そこで考えた解決策として、1つ目は「住んでいる人や観光に来た人が伊東に対する思いを気軽に共有できる掲示板のようなものをつくる」です。伊東の良い所や感動などの思いを共有しつつながっていくことで、自分の知らない伊東市に対して興味が湧きワクワクやドキドキが広がるのではないかと思います。例えば、伊東のなかでも、自分の住んでいない所や行ったことのない所に、面白いお店や集まりなどがあれば、いつか行ってみたいと思ったり、自分の知らないものは他に何があるのだろうかワクワクした気持ちが生まれたりして、実際にその場所を訪れたり、体験してみたりと市民や観光客にも新たな動きが生まれると思います。

2つ目は「高校生などの若い年代の人が主体となってイベントを企画し、行政や民間企

業などの周りの大人がサポートしやすい体制をつくる」です。高校生は自分たちが住んでいる伊東でやってみたいことを大人がサポートをしてくれることにより、最大限に目的を達成することができ、その中で地域のことに関わる楽しさや、地域の大人に支えられていることを実感し、この経験から大きなことを学ぶことができます。サポートをしてくれる大人たちもイベントに参加してくれる人たちも同様に新鮮な体験から学べることが多いと思います。そしてこれらの企画から地域の交流が生まれ、高校生や若い世代と、地域の現役世代や高齢者などがつながり、世代を越えた伊東の楽しい未来というものも育めるのではないかと考えました。周りのニーズをサポートし支えることや、支えられている実感を持つことで、人と人がつながり、それら全体が伊東への関心や発展に根本的につながると思います。

【S委員】

伊豆伊東高校のSです。私は伊東市クイズパンフレットの作成を提案します。

私は伊東市の中学ではなく東伊豆の中学校に通っていました。現在、東伊豆から通学しています。伊東市の高校ということで、もちろん同じ中学校の友達は少なく、右を見ても左を見ても、知らない子達ばかりでした。そんな中で、高校の友達との会話で弾んだことが、自分が住んでいる地域の話でした。同じ伊豆半島でも違うことが多く、新たな発見が多かったです。

そこで思いついたのが、伊東市クイズパンフレットの作成です。この伊東市クイズパンフレットとは、伊豆伊東高校の在校生、主に2年生が、新入生に向けて作成し、市内から入学した新入生と市外から入学した新入生同士の会話の素材にしてもらうためのものです。伊東市のクイズだけでなく、伊東市の魅力、休日に訪れてもらいたいおすすめスポットなど様々なことを伝えることができればいいと思います。このパンフレットを作るために、伊東市のことを調べたり、よく考えたりしなければならないので、在校生は自分の知らなかった伊東市の魅力を発見することができ、郷土愛を育む狙いもあります。

また、伊豆伊東高校の「みらい学」という授業の中で、伊東市のことを調べる時間がありましたが、私は1年生の時、伊東市のことを知らなく、何をどう調べればいいのか分からず、やる気が出ませんでした。そこでこのパンフレットがあれば、高校生活を伊東で過ごせる良さに早く気付くことができますし、気になるところを見つけて調べてみるという、お助けアイテムにもなればいいなと思っています。

最後に、行政の皆さんにお願いしたいこととしては、この素敵なパンフレットを伊豆伊東校内だけに留めておくのはもったいないので、伊東駅や、各観光スポットと連携を取っていただき、観光客の手にも届くといいなと思いました。このパンフレットを通じて、少しでも伊豆伊東高校生、観光客に伊東市の魅力を知ってもらい、また来たい、ずっと住みたい伊東市になればいいなと思いました。

【K委員】

そこで、市にお願いしたいこととしまして、地域や行政の橋渡しをするなど、行動しやすくするために、公式なものとして、学生リーダーを委任していただきたいと思います。また、教育での活用のみならず、市民生活や観光や防災の観点からも魅力的かつ使いやすい公園整備のニーズがあります。公園や港湾、駅前整備なども含め、構想段階で中高生が意見を言える場の創設をお願いしたいと思います。他市では、子ども議会の開催や、高校生に向けた行政の定期報告会に、高校生が積極的に参加して盛り上がっているようですので、そのような場を作っていただきたいと考えます。

具体的なニーズも資料に記載させていただきました通り、①伊東の豊かで美しい自然を教育にもっと生かしてほしい。②伊東の歴史、文化に触れ、伊東に愛着と誇りを持てる子どもを育てたい。③子どもと親が遊べる場所・自転車を練習できるような広い公園がほしい。④給食に力をいれてほしい。幼稚園給食をしてほしい。伊東地産の食材をもっと給食に使って『食育』をしてほしい。⑤高校合併の草創期につき、合併前の高校毎や出身中学校毎に温度差があるため解消したい。となっております。

最後に、全体を通じて申し上げたいことは、人と人との関わり合いが希薄になっている今、自主的に行動し、相互扶助の精神から温かい人の輪が土台となる伊東市をつくるため、助け合いの前提として、まずは、自分のことは自分で行う「自助の精神を養う教育」を行うということを、伊東市の教育理念に明記していただく事を要望しまして、私たちの発表を終わります。ありがとうございました。

【課長】

それでは、市長等との意見交換をお願いしたいと思います。

【市長】

新たな視点も入っていましたので、参考になりました。伊東のことを冷静に分析する中で、先ほども申し上げましたが、気がつかない魅力であるとか、今まで気がつかなかったものが地域資源としてありますし、このような場でご指摘を受けることで気づくことができ、真剣に考えることができると感じました。今後も、いろいろと議論していく中で意見交換ができたらと思います。

観光はですね、かつてはインバウンドで伊東市に来ておりませんでした。欧米の方も増えておりますし、もとより台湾からはたくさんのお客様が来ていましたし、韓国や中国、あるいはタイ、インドネシア、イスラム圏からもたくさん来るようになりまして、今後はインドからもお越しいただけるような話もあります。そこで、どうやって私たちが対応するか、例えば英語ができなくても会話ができる、今はポケトークとかアプリがありまして、英訳変換してくれるのですが、実際に全ての市民の皆様がホスピタリティを持ってお迎えできるのかという課題も残っております。今後の観光地の在り方というのを感じることができました。

それから、H委員からも気づかされることがありました。私も高校生のときに、知らない

ことを知ると、ワクワクして急に大人になったような感覚がありましたから、おっしゃっている意味がすごく伝わりました。これからも市民の皆様が関心をもてるようなことについて、今日の御意見を参考にしながら考えていきたいと思いました。

S委員からは伊東クイズパンフレットの話がありました。東伊豆から通っていただいているということで、学校の中のことだけではなくて、通学中に見える景色についてもパンフレットに入れていただくなど、私たちが気付かない視点で観光客にもクイズ形式で伊東を知っていただく、伊東を好きになっていただく手立てになるかと思いました。

【高橋教育長】

プレゼンありがとうございました。わかりやすく、これからの伊東のことを本当に真剣に考えていただいて、御提案をしていただいているということを強く感じました。その中でお話がいくつかありましたけれども、共有できる掲示板の確保ですとか、イベントを高校生中心にやるとか、伊東市クイズパンフレットの作成ですとか、また子どもたちの声が行政に届くようにするとか、その通りだと思いました。その中でできることを教育委員会としても、一つ一つ皆様に御意見を聞きながら、できることはやっていきたいなということを強く感じました。また、最初に問題解決できる子どもたちを育ててほしいということ、それはその通りでありますし、これから答えがない時代を私たちも生きていかなきゃいけないわけですので、そういうものにチャレンジし、問題を解決しながら、皆様と一緒にやっていきたいなということを強く思いました。大変勉強させていただきまして、今日の話聞いて、本当によかったなと思いました。ありがとうございました。

【課長】

それではCグループ教育分野のプレゼンテーションを終了といたします。続きまして、Cグループ福祉分野のプレゼンテーションに移ります。よろしくお願いします。

(7) Cグループ・プレゼンテーション【福祉】

【T委員】

ただいまよりCグループの発表を行います。福祉のグループは、Y、Y、Tの3名で構成されております。それぞれの職種の良さを生かし、議論を重ねてまいりました。始めに、テーマについてお知らせします。私たちグループは福祉に重点を置き、「生涯「ありがとう」と言い合えるまち」をキャッチフレーズに掲げました。その経緯といたしましては、本市の状況に、高齢者の孤立や高齢者が収入を得る方法が少ないことなどが挙げられ、地域とのつながりや絆の希薄化が課題であります。そんな中、高齢者が生きがいを持ち、社会とつながり続けていけるまち、また世代を越えていい意味でおせっかいしあえることで、良い関係を築き、ありがとうの輪を拡げていきたい、そんな思いを込めてこのキャッチフレーズを設定しました。それでは本題に入らせていただきます。

【Y委員】

私からは、地域の現状の課題、それに対する伊東市の将来像について話をさせていただきます。伊東市の地域課題としては、高齢者が家に引きこもりがちになったことによる

孤立化や収入を得ることが少ないことが挙げられます。原因としては、地域のコミュニティが薄くなっていること、例えば気をきかせて手伝ってくれる近所の人が少ないことや、もともと社会とのつながりが弱い方が多いことが考えられます。個人的な課題としては、免許を返納して移動手段がないこと、そもそも社会参加を求めていることが挙げられます。伊東市はご存じのとおり坂が多く、車がないと不便であります。タクシーを使えば移動することはできますが、気軽に使える金額ではありません。そして、高齢者になると、お金を稼ぐ手段が限られてきます。経済的な問題、孤立化などが相互に影響して、現状の課題となっていると考えます。

伊東市の地域としての将来像は3つあります。1つ目は、高齢者になっても収入を得ることができる。2つ目は社会とつながることができる。3つ目は、1人で行きやすい場所の充実です。この3つが揃うことで、社会参加をしたいけどできない、人が多いところは嫌だけど外出はしたい、とにかくお金がなくて何もできない、などの様々な悩みを持つ方が生きがいを持って生活を送ることができるはずです。個人の将来像としましては、スマートフォンやタブレットを使いこなして情報収集することができる、この人に相談したら通いたいところに参加できるといった窓口になる人が増えるということが挙げられます。また、昔ながらのおせっかいさんが増えていくことで、地域全体としてのつながりが強くなっていくため、地域住民一人一人が周りの方を気にかけるようになるのではないのでしょうか。この後具体的な解決策を提案いたします。

【Y委員】

具体的な解決策を提案させていただきます。私たちは、高齢者が一人でいてもいい空間、お邪魔ではない居場所、拠点の創出を提案いたします。そこでは、高齢者が活躍できて、収入や情報を得ることができます。また、緩やかに社会とのつながりを築けることができる環境です。具体的には、手芸が得意であれば幼稚園児の手さげバックの製作でしたり、若いお母さん方にミシンを教えたり、大きな荷物を抱えた外国人観光客に対する荷物の一時的預かりサービスの提供、他には伊東ならではの物販として、野菜や果物、お惣菜などの加工品、浜に流れ着く流木を販売するアイデアも出ました。流木は、水槽に入れる小さいものと1,000円程度、インテリアのタペストリですと、2,000円強でネット販売されておりますので、需要が見込まれると思います。前処理として、あく抜きで煮る必要がありますので、高齢者の居場所で作業できるかと思います。収入を得ることは、社会とのつながり、やりがいや精神的な安心につながります。この居場所や拠点は、社交的でない方も、1人で活動できて、納品時に居場所を訪れることで、誰かと緩やかにつながることができます。また、困りごとができたとき、居場所のおせっかいさんが、行政であったり、解決につながる機関であったりに橋渡しをしていただくことも期待できます。行政には、人、もの、お金、場所の中で、場所について、市所有の土地や建物や空き家情報、空き店舗の情報の提供、また人という点では、いろいろな部署を経て知識を持っている市職員の知恵をお借りしたいと思います。人脈という点では、市から委託されてい

る生活支援コーディネーターとの連携も考えられます。また、こういった居場所に市長が来ていただけると、何よりの励みになると思います。私たち自身もこの居場所を立ち上げ、継続運営に向けて、今以上に地域資源を知り、高齢社会を自分のこととして捉え、今以上におせっかいになることで関わりたいです。こういった居場所は行政というより、住民主体であることや、民間の活力を生かしていければいいと思います。

高齢期になるとできないことが増えます。「ありがとう」と言うことの方が、言われることより圧倒的に多くなります。居場所ができることで、自然と「ありがとう」が飛び交う場所となればいいと思います。元気な高齢者も要介護認定を受けた高齢者も、例えば認知症と診断されていても、やはり誰かの役に立ち、感謝されることが生きがいにつながることを考えております。この他にも、おせっかいさんを表彰する制度など、たくさんのアイディアが出ました。以上でCグループ福祉の発表となります。

【課長】

それでは、市長等との意見交換をお願いしたいと思います。

【市長】

ありがとうございました。福祉は全ての人が、誰も取り残さないっていうような言い方をしますけれども、全ての人に対しての共生社会に向けて、市は何か事業を起こしていく、支えになっていく、それから民間事業者の皆さんも、例えば高齢者であったり、小さいお子さんだったり、障がいを持つ方だったりということで、今日は中心的には高齢者、伊東市は高齢化率がほぼ44%に達していますので、半分近くの方が65歳以上になりました。いずれ私たちもそうなるわけですから、今から自分のことだと思ってやっていくべきだということであると最後にいいお話だったなと思いました。

居場所作りはですね、伊東市も常にやっておりますが、そこで収入も得られるようなことを考えていくという御提案はとてもいいことだと思います。いくつかの課題の中で収入もそうですし、社会から離れていっている、あるいは1人での生活とか、そういうことが課題になってくると思いますので、私たちがそこを把握しているつもりではいるのですが、先ほどの観光客に教えられるっていうところもそうですが、わかったつもりだけでもわかっていないっていうことがあり、まさに今日のプレゼンテーションは、全てのセッションで皆様から教えられているなと思いました。

福祉の話に戻りますけれども、先ほどおせっかいのお話で、本当にそういう方が少なくなってきたっていうか、関わりすぎると変な人って思われたり、小さい子に声かけるにしても、変な人に声かけられたと言われたりするものですから、難しい時代になりました。だけど、コミュニケーションをとっていかなければなりませんので、やっぱり伊東市に住んでよかったとか、このテーマである生涯ありがとうと言い合えるまちという、こんな素晴らしいことはないと思いますので、だんだん高齢者になっていくと、誰かの役に立ちたいけれど、だんだん体が悪くなってくるということは大きなテーマだと思いますので、手芸ですとか、例えばミシンとかですね、そういうものもできるでしょうから、若い世代とか

に販売する、そんな場所を作っていることなど参考になったので、今後またやっていければなと思いました

【岸副市長】

1年間いろいろとお話し合いをされてきたと思いますけれども、今日の発表はありがとうございました。3人とも福祉のプロフェッショナルであると聞いて臨んだのですが、さすがだなと思ったのは、まず、現状分析が各々の皆さんの体験からの出てくる言葉なので、すごく心にグサッと刺さりました。その現状把握からの課題解決策なので、実現可能もしくは今後の総合計画の中の福祉の方策を考える際の最も根本的な考え方として、「ありがとう」を言い合える、また高齢者福祉について支え、高齢者は支えられるべきものだっていうのではなくて、お金を稼ぐし、強いつながりを持てるし、孤独を楽しむけど、孤立はさせないという新しい高齢者像を今日お聞かせいただいたかと思いますので、今後の伊東市の総合計画の中の高齢者福祉に対する視点がもう一つ増えたかなというような宝物になるような発表を聞かせていただきました。ありがとうございました。

【課長】

以上で、Cグループ福祉分野の発表を終わります。ありがとうございました。それでは、市長から最後に講評をお願いいたします。

(8) 講評

【市長】

私は、この未来ビジョン会議を約8年前に立ち上げましたが、ここで私たちが気づけない御提案をいただきながら意見交換したいということで、当初から多くの委員に御就任いただきました。私が市長に就任する前に感じていたことは、私も市民として声をあげても受け入れてもらえない、届かないというような壁がありまして、それを払拭したいということで、基本的には1年間ずつ委員の皆様と交代していただきながら、8回目となりました。今年は特に皆様がお話し合いをしていただき、各部門で気づかされたことも多かったです。今後も、何かの形でつながっていきたいと思っております。本会議の担当部署である企画課にも気軽に来ていただきたい。皆様と行政とで壁はないと思ってください。高校生世代の方も同じです。自分がいいと思った案を発信する場がなければいけない、これは私の第一の公約でございますので、今後もいろいろな形で話し合いができるようにしていきたいと思っております。本日いただきましたご意見につきましては、全体をまとめた上で、政策に反映できることはやっていきたいと考えておりますので、今後の動向を気にかけていただけたらと思います。本日はありがとうございました。